

# 「紙の本に込められたもの」

ニユージャージー日本人学校中1

上野 舞音



本が好きな私は、ある二ユーに衝撃を受けた。それは、テキサス州で、すべて電子書籍の公立図書館がオープンしたというものだった。

日本でも、図書館の一部で電子書籍を貸し出すところはあるが、すべて電子書籍の公立図書館は、今のところない。アメリカでそんな図書館がオープンしたという事は、それだけ電子書籍を利用する人が多い、ということではないだろうか。そこで、私は今回、その原因を探るため、アメリカの書籍と日本の書籍を比較してみた。

アメリカで電子書籍がヒットした理由として、電子書籍は紙書籍の半額以下の値段である事、書店の数が少ないという事情(広大な領土に反する書店数は日本の三分の二という少なさ)、紙質が良い、そして電子書籍は端末一つで千冊読める、などが挙げられる。

電子書籍は以上の問題点を克服していると言え、電子書籍が大ヒットしたのも納得だ。

しかし、日本はアメリカほど電子書籍が普及していないように思える。その要因は、紙質が良く、コレクションとしての機能も果たすということ、書店数が多いため、あまり不便に感じない、文庫本は五百円程度、ハードカバーでも千五百円など電子書籍の安さが目立たない、そして電子書籍は未だコンテンツ数が少ないということにある。どうやら、日本人は電子書籍のメリットをあまり感じられていないようだ。

私は断然、本は紙派である。紙の感触や色、本棚に並べたときの満足感が楽しめるからだ。

そこで、私はさらに「書籍の紙」について調べてみた。書籍用紙をおもに製造している日本製紙石巻工場が舞台の「紙つなげ!」が本の紙を造っている」を読み、書籍の紙を造っている人たちの思いを学んだ。

その中で私が心を打たれた一文がある。

「紙に生産者のサインはない。彼らにとつて品質こそが何よりも雄弁なサインであり、彼らの存在証明なのである。」

本の奥付には、著者や装丁者、発行者、印刷会社、製本所、発行所の名しか記されていない。しかし、本が私たちの手に届くまでに、名が載ることのない様々な人の手を渡り、一冊の本ができていくのだ。

今後、本を手にとったとき、私はきっと、見えない人々のことを思い浮かべられるだろう。

今回、紙書籍と電子書籍のメリットデメリットをいろいろ感じる事が出来た。

どちらが良い悪いということではなく、私たちが双方をうまく使い分けることで、これからもお互いが共存していけるはずだ。

改めて、私は紙の本が好きになった。その手触りも、あたたかい色も、紙とインクのおいも、見えない人々の思いが詰まった一冊なのだから。

(滞米1年6か月)